資料紹介

ボリス・ファウスト著（鈴木茂訳）『ブラジル史』明石書店　2008年　544ページ

本書は，ブラジルの著名な歴史家ボリス・ファウストの『História do Brasil』（1994年）の要約版（2001年）を日本語に全訳したものである。ただし本書では，2001年の原著にはない図表や最近の動向が加えられ，1500年のブラジル“発見”から2003年のルーラ政権誕生までの歴史が，植民地，帝政，第一共和政の各時代，ジェトゥリオ・ヴァルガスの国家，民主主義の実験，軍事政権と民主主義への移行／確立，という六つの時代から論じられている。また，巻末には年表および索引（訳者作成）が収載されており，ブラジル史を学ぶ教科書としても活用できる大変有益な一書となっている。

著者は「日本語版への序」において，ブラジルの歴史をあまり知らない日本の読者を対象とした本書の意図を，歴史叙述に力点を置き，著者が基本的と考える知識を提供すること，および，ブラジル史研究に関する重要な論争を紹介することだと述べている。また同国の歴史について，進化論的に捉える単純な視点と「惰性」を強調する不変的な見方の双方を批判し，これらと正反対の「ブラジルは変化する」という視点に立つと明言する。さらに，文化に関してはその複雑さと重要性ゆえ，別の本にまとめるべく本書では対象としていない旨を付説している。

近年のブラジルは，経済の安定した成長と潜在力，民主主義の定着が進む政治とその重要性，市民社会の興隆や不平等の是正などから，世界から注目を集めている。また，在日ブラジル人の存在や2008年がブラジルへの日本移民100周年だったことなどから，日本でも同国に対する関心が高まりを見せている。したがって，ブラジルの歴史をより深く知り得るとともに，同国について日本や世界との関連から考えるきっかけを与えてくれる本書が，「日本ブラジル交流年」に日本語で刊行された意義は非常に大きいといえる。

（近田亮平）

富野幹雄編『グローバル化時代のブラジルの実像と未来』行路社　2008年　271ページ

本書は，ブラジルの「過去からの歩みと現在の実像を種々の側面から浮き彫りにすることを目指し」た書である。刊行年の2008年が日本移民100周年だったこともあり，高まりつつあるブラジルへの関心に応えるべくさまざまな話題が取り上げられている。

全13章から構成される本書は，まず第Ⅰ部において，社会を深く特徴づけてきた奴隷制と奴隷貿易，および，受け入れから送り出し国へと変化した国際労働力移動の観点から，ブラジルの「過去からの足跡」を論じる。

次の第Ⅱ部では，都市と北東部の貧困層の生活史に焦点を当てた現代社会，拡大する都市空間における貧困層の住宅問題，都市と農村部を舞台とした社会運動の現状，人種と地域格差から見た貧困と所得分配の不平等という視点から，ブラジルの「多様性と不平等」を詳述する。

最後の七つの章から成る第Ⅲ部では，リオのファンキ音楽に表出されるファヴェーラの若者の声，パンタナルのエコツアーをはじめとした観光，多様性と格差を特徴とするブラジルの教育制度と問題点，映画を中心とした民衆文化と近代国家形成を目指した政治の歴史，住民参加型を特徴の一つとする地域開発と地方財政，定住化が進む在日ブラジル人の直面する現状と課題，世界的に注目されるアグリビジネスの成長とアマゾンの森林破壊という多様なトピックにおいて，ブラジルの「現下の諸相と将来への息吹き」を論述している。

本書はブラジルに関するエッセイ集という感が強く，タイトル中の「グローバル化時代」との関連性や，依拠するデータなどの出所や論点があまり明確ではない個所があり，また，やや主観的な見解や僅かではあるが事実と異なる記述も見られる。しかしこのような問題点があるものの，ブラジルに関する知識や理解をより深めるための一助となる有意義な書だといえる。

（近田亮平）

石井章著『ラテンアメリカ農地改革論』学術出版会 2008年　404ページ

本書は，ラテンアメリカの農地改革に関する研究の第一人者である著者が，これまでの研究の成果をとりまとめた一冊である。ラテンアメリカの農地改革について学ぶのに欠かせない書籍であることは言うまでもないが，ラテンアメリカの農村社会やそこにおける社会問題を理解する上でも本書は有用である。

ラテンアメリカの土地所有は，ラティフンディオ（大土地所有）とミニフンディオ（零細土地所有）からなることはよく知られている。このような状況下の農地改革とは，国がラティフンディオの土地を収用して，ミニフンディオや農業労働者に分け与えるものと理解されることが多い。しかし国によって農地改革の方法が大きく異なり，国有地の払い下げや未開拓地への入植など，既存の土地所有構造に影響を与えない農地改革もみられた。第１章はラテンアメリカ各国で行われた農地改革について国ごとにその概要を紹介している。

多様なラテンアメリカの農業を理解するには，農村における人種構成，土地所有構造，農業経営形態などに関する理解が必要である。第２章はこれらの視点に基づいてラテンアメリカ地域を類型化した先行研究を整理している。同じ大土地所有であるアシエンダ型とプランテーション型でも，人種構成や地域社会の性格に注目すれば，その違いが明らかになる。

その他の章では，メキシコ，ペルー，中米諸国を取り上げて，農地改革の実態や農民運動の変遷から新自由主義に基づく政策による影響まで，20世紀におけるラテンアメリカの農業部門の変容について分析している。特にメキシコについては，著者自身が訪問した農村の事例が興味深い。

近年ラテンアメリカに対しては世界の食料供給基地として期待が高まっている。この地域の供給能力を理解するためには，主体となる生産者を取り巻く農業・農村の社会経済的構造を理解することが必要になる。本書はその理解の助けとなる。　（清水達也）

北野収著『南部メキシコの内発的発展とNGO ――グローカル公共空間における学び・組織化・対抗運動』勁草書房　2008年　355ページ

本書は，メキシコ，オアハカ州において活動するNGO指導者等からの聞き取りを基に，それらの運動の意味を内発的発展論，知識人論という観点から分析したものである。

著者は，いわゆる開発そのものに異議を唱えるポスト開発論的な立場の運動と，主体的にオールタナティブな開発を目指す立場の運動とを，共に，ローカルNGOをその担い手とし，草の根における実践や内発的なイニシアチブを重視するという点で基本的に同一のものとして把握し，それらを「内発的発展を目指す運動」と呼ぶ。そしてそれは，指導者たちの下に「ポスト新しい社会運動」として地域における対抗的ヘゲモニーを形成し，社会変革の一翼を担うものだとされる。

第Ⅰ部では，NGO組織「異文化出会い・対話センター（CEDEI）」と「地球大学」の代表エステバ，個人として住民支援・教育の活動を行うイサベル，および「地球大学」の学生３人らの運動に至る個人史が叙述され，フェアトレードの父とされる「イスモ地域先住民族共同体組合（UCIRI）」の指導者バンデルホフの思想，「共生（conviviality）」思想で高名なイリッチとエステバの思想的交流も紹介される。エステバとイサベルはマルクス主義思想を持ち，前者は左翼系ゲリラに，後者は左翼的政治運動に積極的に加わる等の経験を経ており，「生まれ変わった知識人」である。

第Ⅱ部では，教会系NGOのジェンダー問題に端を発する活動を行うSIFRA，農村ラジオ局を運営するコミュナリティ財団，オールタナティブを求める思想に基づき有機農業や地場市場づくり等を進める仲介型NGOのBibaani，コーヒー生産者組合CEPCO，プエブラ・パナマ開発計画PPP反対運動を進める三つの運動を扱う。

オアハカ州における運動の系譜を丁寧に押さえた上で，運動論や知識人論を展開していることが研究書としての価値を高めている。　（米村明夫）